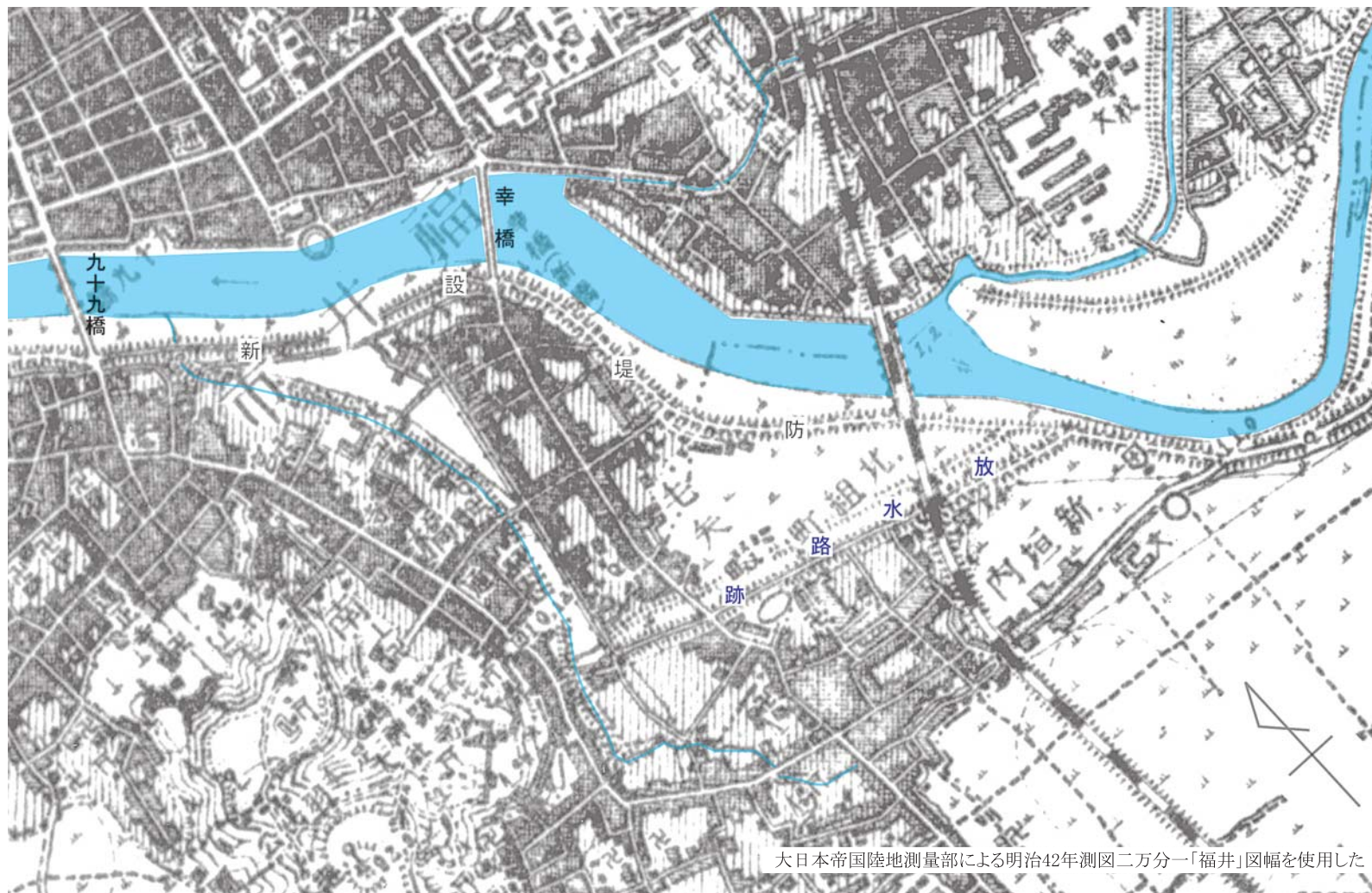


越前三大川沿革図 足羽川之図 部分 明治初年 松平文庫 松平宗紀氏所蔵 福井県立図書館保管



大日本帝国陸地測量部による明治42年測図二万分一「福井」図幅を使用した

### 足羽川（福井市街付近）

二〇〇四年七月の福井豪雨により、福井市街の足羽川（図では右から左に流れる）左岸の堤防が決壊し大きな被害を受けたが、すでに幕末から明治の頃、この決壊部分を含む橋南（福井市街の足羽川より南の地域）は、治水上大きな問題を抱えていた。

江戸時代福井城下を流れる足羽川には、はじめ防御上の理由から図左端の九十九橋だけが架けられていたが、左岸に宅地を拝領した三岡八郎（由利公正）の発議により、一八六二年（文久二）新たに幸橋（図中央左）が架けられた。この橋は九十九橋と比べて極端に短く、当時から通水の妨げになることが危惧された。このため六四年（元治元）には、左岸上流の堤防を切り明け（図右下）、洪水時の放水路建設が始まったが、未完成のまま廃藩を迎えた。このため、連年のように洪水に襲われた明治一〇年代には、幸橋とその

南詰の部分が通水を妨げるとして、水害の度に論争がくり返された。とくに八三年（明治一六）一〇月から一月の福井新聞では堤防の建設を急げとする社説に対して、自然の力に勝てるのかと投書があり、治水論をめぐって論争が展開されている。その中ではこの幸橋および放水路問題も大きな論点となっている。

この問題は一九〇三年（明治三六）から開始された、九十九橋の長さにあわせて築かれた新堤防建設によって解決された。〇六年に築堤工事が完成すると、新堤防に市民有志の寄付を得て約千本の桜楓が植えられた。これは新堤防建設により消滅した桃畑（遊水池）に代わるものであり、四五年（昭和二〇）の戦災による焼失ののち、新たに植えられた現在の桜は、明治の福井市民の景観保存についての意志を引き継いだものといえることができる。